

東雲^{しのめ}を茜色に染めて現れる日の出。
清々しく淑気に満ちた元日の空を、初御空^{はつみそら}とよぶ。

「朝日に一番近い街」として知られている、北海道最東端の根室市納沙布岬。
元旦には、北海道一早く日の出を拝める場所として全国各地から大勢の観光客が訪れる。
二見ヶ浦の夫婦岩も、初日の出の名所としてあまりにも有名である。
古来、お伊勢参りの人々は、日の出を拝み二見浦の清き渚で禊を行い、参拝するのが習わしであった。
人々が太陽を崇め祈ることは、太古から自然なこと。
太陽は、万物の命のみなもと。
すべての動物、すべての植物、森羅万象が太陽の光で輝き始める。

ふるさとの風
平成二十八年 睦月



SAKAKI

榊

—聖なる木—

元日や神代のことも思はるる

荒木田 守武

新しい年が明けた。
伊勢神宮神楽殿では、初神楽が始まる。
恒例の倭舞、人長舞、その年にふさわしい舞楽が雅やかに奉納される。
～みやびどの させる榊を われさして よろづ代までに かなで遊ばむ～ 倭舞
神遊びといわれた御神楽。あでやかな装束に身を包んだ舞人が、歌に合わせて幽玄に舞う。
その手には、五色の絹で飾られた榊の枝を持つ。
古来、植物には神が宿るとされ榊は特に神聖視されてきた。
『古事記』には賢木と書かれ、天の岩屋の段で神々が天香具山の真賢木を掘って勾玉や鏡、麻緒をつるして神の依り代としたと記されている。

～天の香山の五百津真賢木^{いほつまさかき}を根こじにこじて、上つ枝^{かみえ}に八尺の勾璽^{やさか}の五百津^{まがたま}の御すまるの玉を取
り著^なけ、中つ枝^{なかえ}に八尺の鏡^{やあた}を取り繫^{しも}げ、下つ枝^えに白丹寸手^{しらにきて}、青丹寸手^{あおにきて}を取り垂^しでて… (略)～

“サカキ”は神事に用いる木として作られた国字の「榊」の字を一般的には用いるが、その語源には諸説ある。

四季を通じて青々としている常緑樹でありその生命力の強さから「栄える木」、或いは、神と人との境界を示す「境の木」や神聖な木を意味する「賢木」が転じたという説もある。

ツバキ科の常緑高木で関東地方以西、四国、九州、沖縄に分布するが、榊が生育しない関東以北では、類似種の“ヒサカキ”が“サカキ”の代用として神事に用いられる。

ほんさかき まさかき
本榊、真榊といわれる“サカキ”に対して、“ヒサカキ”の名称は非榊（榊にあらず）とも、葉が小さいので姫榊からきたともいわれる。

元々は、特定の木を指した名称ではなく、神事にかかわる常緑樹全般を榊といていたようで、オガタマノキ、シキミ、モクセイなども含んでいた。現在のように特定に植物を指すようになったのは平安時代以降のことと考えられる。

神宮の祭典や飾りで重要な役割を持つ榊。

修祓の際に神職が頭上で左右に振って罪・穢れをお祓いする際に使われる大きな枝の榊は大麻、御神前に捧げる大麻よりやや小ぶりの榊を玉串と呼び祭典には欠かせない。

かつて伊勢神宮では、めぐりさかき
廻榊と呼ばれる神事が行われていた。

外宮九丈殿と五丈殿前の石原はちちおぼ
大庭といわれ、遷宮祭の玉串行事や幣帛点検の儀式が行われる。左隅（西南）にある一本榊はめぐりさかき
廻榊と呼ばれ、その榊の下で宮司が玉串をとり榊の東を廻り、禰宜が玉串を持って榊の西を廻る。そして、祭典が終わると宮司・禰宜が冠につけていた木綿をこの榊にかけたという。

廻榊 此の所に一本の榊あり。其の榊の下にて、宮司玉串を取り、榊の東を廻り、禰宜は玉串を取りて、榊の西を廻る故に、廻榊といふ。解齋の時、宮司・禰宜の冠につけたる木綿かづらを、此榊にかくるなり。此所其場所広きゆゑ大庭といふ。

『伊勢参宮名所図会』

また、毎年の神嘗祭には、斎王が太玉串（1.5m前後の榊に木綿をとりつけたもの）を内玉垣御門前に奉る儀式が行われていたとある。

「この神事の意味は、斎王が大神への奉仕者であると同時に、“大神の御杖代”であることも象徴していて、サカキの枝は重要な依り代であることがわかる。」

『神宮の樹（一）サカキをめぐる民俗』 足田 輝一

榊は古来より神の依代とされていたのである。

神宮の鳥居や玉垣、御門には垂をつけた多数の奉飾御榊がしつらえられている。建久年間の『皇太神宮年中行事』には、「惣御榊奉、差事年中四箇度也。四月六月九月十二月御祭度也」とあり、平安時代、榊は年に四度、祭の際に取り替えていたことが窺われる。

今日では季節にもよるが、ほぼ十日に一回、また祭典の前日と正宮の御掃除の日で合わせて年に四十三度新しい榊が飾られる。一回に必要な量は内宮に幹榊三十六本、枝榊百二十二本、外宮は二十八本と百十八本、別宮を加えると四百本以上となる。

幹榊は鳥居と御門に、枝榊は御垣に用い、姿を揃わせ和紙の神垂をすべてに付けて飾る。これらの榊は古くは山向物忌や玉串内入という神職が調達していて、一志郡久居町榊原（現津市榊原町）や、松阪市漕代町高木（現高木町）から納められていた。現在、年間に使用される本数は二万本にも及ぶが、神宮の山で自生したものと、神宮司庁営林部が主として伊勢市佐八町の神宮苗圃で実生から育成し計画的に育てられたものが用いられている。榊が両宮の齋館へ納入後、一夜の参籠潔斎した神職二名が両宮ともで約一時間半かけて飾るのだという。

内宮の御垣内の中重鳥居の両側には多数の榊が立てられているのを見る。これを八重榊という。中重鳥居は八重榊鳥居ともいわれるが、内宮独特のもので外宮には見られない。八重榊は、一列に八枝を八重、六十四本が片方に立てられる。これは古くは山向物忌が三節祭に奉飾することになっており、現在では一年に奉飾日が二十四度と定まっている。八重榊は、昔、玉串を立ててお供えしていた時代の名残だともいわれる。

神宮の森は、二千年という時を超え至高の聖地として美しい自然が息づく。
神の森に包まれて二十年ごとに新しく生まれ変わる神殿。
榊には、さらに瑞々しくと、祈る気持ちが込められている。
心洗われる緑の榊の一枝は、神々しく、まさしく神道の理想「常若」…。

神垣の御室山の榊葉は神のみ前にしげりあひにけり

神楽・東遊

神宮の山々の稜線が徐々に明瞭になる。

空が茜色に染まり始めた。

暖かい一筋の光が神域に差し込んだ。

新しい年が明けた…

神の木ともいわれる榊。

伊勢地方では、榊の枝を正月の門飾りにする家も多いようです。

今年も良き年でありますように…。



SAKAKI

榊

—聖なる木—

【参考文献】

「伊勢神宮の衣食住」 矢野憲一／著 東京書籍 L174／ヤ

「伊勢神宮 日本人のこころのふるさとを訪ねて」

矢野憲一／文 篠原龍／写真 講談社 L174／ヤ

「瑞垣」142号 神宮の樹 (一) サカキをめぐる民俗 足田輝一／著

「検定お伊勢さん公式テキストブック」 伊勢商工会議所 L243／ケ

「伊勢参宮名所図会」 薮閑月／画・編 原田幹／校訂 国書刊行会 L290／シ

「増補大神宮叢書 13 神宮年中行事大成前篇」 吉川弘文館 L174／ダ／13

「神宮要綱」 神宮司庁／編纂 神宮司庁 L174／ジ

「勢陽五鈴遺響 5」 安岡親毅／著 倉田正邦／校訂 三重県郷土資料刊行会 L290／ヤ／5

「日本古典文学全集 1」 小学館 918／ニ／1

「日本古典文学全集 7」 小学館 918／ニ／7

「図説花と樹の大事典」 植物文化研究会／編 柏書房 R470.3／ズ

「字訓」 白川静／著 平凡社 R813.6／シ

図書館だより 1月号 No.167 増刊 ふるさとの風 睦月

平成 28(2016)年 1月 9日 発行

(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館 指定管理者/株式会社 図書館流通センター (住所) 〒516-0076 伊勢市八日市場町 13-35
(電話) 0596-21-0077 (FAX) 0596-21-0078 (ホームページ) <http://iselib.city.ise.mie.jp/>

© 2016 mami ishikura